

『彼の肖像』

私が敵と火花を散らして激しく撃ち合っている時、それは大概竜である事が多いのだが、その視界の端に白い風が吹いているのが解る。

もちろん風に色などついてはいない。それは彼の髪の色だ。何故か私の視界にそれが入ってくる。

私が敵と戦っている時、彼の姿は見えないはずだ。

戦士の習いとして戦う相手だけでなく周囲の状況に気を配りながら、私は敵と撃ち合う。

しかし実際に視線を動かしている訳ではない。

私の周囲で、どのあたりで誰が動いているのか、それを気配で感じ取っているだけだ。

私の後ではイリネアとドウルワイトがいる。いつもなら他にリュイシスがいる筈なのだが、

魔術師である彼は盗賊上がりのクレドネエと一緒にケルマディクへ調べものをしに別行動だ。

私は仲間たちを背に守りながら、敵と撃ち合う。

トウルスはその時、まるで別の方向にいます筈だ。私が敵を引き付けている間に、致命的な一撃を与える為に、相手の隙をうかがっている筈だ。だから彼の気配が動いているのは解る。しかし何処に彼がいるのかは見えていない。

その白い髪が私の視界に入る事はない筈だ。私は必死に竜と撃ち合っているのだから。

不意に竜の鱗や肉や、骨が砕ける音がする。竜自身も何が起こっているのか解らない様子だ。だが次の瞬間には自分が致命的な傷を負ったのだと悟る。

白髪のトウルスが蒼白の顔で渾身の一撃を竜に突きたてたのだ。

竜は怒りの咆哮をあげ、手がつけられない暴れ方を始める。だがもはや終わりだ。

やたらに腕を振り回し力任せに殴ろうとする度に血は流れ、流れた血とともに力も失われる。

イリネアの矢が立て続けに竜の急所に当たる。

私は竜の前脚を払う。

竜に馬乗りになったトウルスが、竜に負けじと咆哮をあげ、再びその体に巨人用の大剣を突きたてた。

罅り殺しと言われればそれまでだ。だが確実にこの狡猾な悪竜を殺すには、こうするより他にない。

私は無残に横たわる竜の屍を後味悪く眺めながら自分自身に言い聞かせた。全ては私の非力さ故なのだと。人を殺す技に長けても、竜を殺すには足らぬ我が身なのだと。

だが白い風は、私の悔悟など意に介さぬように言った。

「やっつくたばったか。飯にしようぜ」

私はそれに応じる事ができない。他の仲間たちはそれぞれに賛成し、今失われた命への悔やみなどない。前の私ならば、そんな仲間たちの態度に嫌悪を抱いただろう。

だが今の私は、それが彼らと私との違いなのだと強く感じるだけだった。

それでもなお、いやだからこそ、私は白い風を目で追った。

竜を、己の一族を滅ぼした赤き巨龍を憎む彼は、私の様に失われた命を惜しむ事もない。その不思議にさらりとした態度に、私は目を奪われる。

何故そうなのだろうか。解らない。

嫌悪ではない。憎悪ではありえない。しかし好意とまでは言い切れない。そんな不可解な感情。

白い風が舞っている。私は、ただ立ち尽くしてそれを追うばかりだった。

ニームは廃墟だった。

輝くばかりに白い町並みは、全て瓦礫の山と化していた。無人ではない。しかしかつての瀟洒な富裕都市の面影は完全に消えた。徘徊するのは瓦礫に埋もれた高価な家財道具や美術品、金品を掘り出そうとする人影ばかりだ。

崩れ果てた屋敷の持ち主が掘り起こそうとしているならマシだった。

大概は盗人や廃品回収のような場末の商人、そういった輩に値打ちのものを引き取ってもらおうと、訳もわからず光り物を拾い集める浮浪者たちばかりだ。

既にニームは滅びたのだ。

そういつた連中は、ロスペロツソ襲撃後にやってきた者が多く、手がかりになりそうな事柄を知っているものは少ない。だが、中にはニーム崩壊以前より、ニーム周辺で商売をしていた者もいる。

奇跡的にロスペロツソ襲撃を免れてニーム入城待ちの人々相手の商売から、盗品や発掘品を非合法に商う事へ転身したものだ。こういういかがわしい素性の者たちと話すのはクレドネエが得手なのだが、彼は今リュシスとともにケルマディクでロスペロツソ自身の事を調べている。

仕方がないのでドウルワイトが聞いてみた。彼は小人族であるが、人好きのする物腰と語り口で意外に良い話の聞き手になれるのだ。

ポルメリアもその容姿ゆえに愛嬌の一つも見せれば話が違うのだろうが、しかし彼女は敵対するものが『善なる軍神の戦闘人形』と呼ぶほどに世辞に疎い。戦いのみに秀でるといっても過言ではない。相手の不正を見抜こうと威嚇するばかりで、とても話を聞くような態度ではなかった。

「聖なる騎士というものは、『弱きを助け悪きを倒す』ものだから、そんな風に他人を威圧するのは違うと思うけれど」

見かねたドウルワイトがそういう。しかしポルメリアにはそんなつもりはなかった。清冽な青い瞳が疚しい心の持ち主を怯えさせるのだろうか。

何にせよ、ニームを襲ったロスペロツソは西の空に去っていったという事だ。

竜にありがちな光り物をさらう事すらせず、殺戮のみを楽しんだ後飛び去っていったという。財宝をこよなく愛するはずの竜にあるまじき行動だが、それが解る人間はここにはいない。

ニームに残った人々も自分たちの新たな生活の糧が廃墟に埋もれている事を喜びこそすれ、怪しむ事はない。

悪魔の血脈に繋がるならば殺戮のみで満足するのもおかしくないと、ドウルワイトは納得していた。

「漠然と西に向かっただけでは良く解らないね。」

幸運の神にお伺いを立ててみようか？簡単な質問には『はい』『いいえ』で答えてくれるよ」

結局のところ聞き込みでは相手が西に向かった事しか解らない。ならば神に問い掛けてみようとドウルワイトは提案する。

「・・・具体的な質問のみに、説明一切なしで『はい』『いいえ』でしか答えてくれないのよね。神様ってほんと不親切だわ・・・」
以前にドウルワイトの提案に従った事があるらしいイリネアは、それほど乗り気ではなかった。どうやら手間隙かけて供物を捧げて、つまり出費して呪文を唱えている割に、こちらが思うほどの情報を与えてくれないのが不満らしい。

しかしドウルワイトはそんなイリネアの不遜な態度にも寛容な笑みを浮かべた。

「神々は神々でお忙しいのさ。信徒一人一人の願いを叶えるほど暇じゃない」

「それなら神を信じる意味なんてないんじゃない？」

「現世的な利益ばかり求めるなら、ただ神に祈りを捧げるといっことは無意味かも知れないが、しかし我々は現世利益だけで生きている訳じゃない」

「例えば？」

「神を信じる事は心の支えにもなる」

そんなドウルワイトの言葉を聞いて、イリネアとトウルスは失笑した。その笑い方がそっくりで、ポルメリアには二人が姉弟に見えた。

「何もしてくれない神を信じるよりも、神の力を具現化する神官や僧侶を信じる方が気が利いているわ。私が信じるのは神ではなく、僧侶のあんたよ」

このイリネアの言葉にはドウルワイトも溜め息をついた。

「嬉しいんだか悲しいんだか、ちょっと一言では言えない言葉ですね。

しかし、他に手がかりはないのだし、神にお伺いを立てますよ。いいですね」

「しょうがないわね。やってちょうだいな」

話が決まり一行は一番近くの大きい街へ移動する。

供物を用意し神と交信するための準備をするには、野宿ではマズイというのだ。精神が集中できないという。供物も神に対して失礼にならないものを用意しなければならない。その手間を考えてイリネアは嫌がったのかも知れない。

ポルメリアも善なる軍神より召命を受けた身の上だが、直接言葉のやりとりをした事はない。命令された事もない。だが彼女には解っていた。『悪』を滅ぼせば良いのだと、それが使命なのだ。

しかしそれに不安を覚える事がある。私は本当に善の為に戦っているのか？と。

その保証を神は与えてくれない。それすらも試練であると言われるのかも知れない。だとすれば酷く残酷な事だった。

時々ポルメリアは、自分が何をしているのか解らなくなる。他の事で恐怖を感じる事はない。

自分の命が尽きるまで彼女は一片の恐怖心すら覚えずに最後まで戦うだろう。

だが自分のやっている事が見えなくなると恐ろしくなる。自分が何者であるのか解らなくなるのが怖くなる。どうやら神は、そんなものに対して恐怖を感じる事が理解できない方なのかもしれないなかった。

ふと顔をあげるとトゥルスが退屈そうに宿の窓から空を眺めていた。

彼の白髪には艶はない。乾いてサラリとしていて、そして美しさに欠けていた。

生来の髪ならば、艶やかな美しさが現れるのだろう。

逆に年輪を重ねた末の銀髪ならば、その人の年に相応しい雰囲気を作り出すのだろう。

だがトゥルスのそれは恐怖に漂白されたものだった。受け入れる事のできぬ過去だった。

黒い瞳は真の闇だった。そこに喜びの光はない。少なくともポルメリアが見た事はない。

いや、健全な喜びの光を見た事がないと言い換えるべきか。復讐を果たす暗い歓喜が、彼が示す唯一の喜びだった。

「なんだ？」

彼女の視線に気づいて彼はポルメリアを見た。

ドウルワイトは儀式の準備に忙しい。イリネアはその付き合いで供物を買出しに出かけている。今ここにいるのは、トゥルスとポルメリアの二人だけ。

「何を見ていたのです？」

退屈な質問をしていると我ながら苦笑する。トゥルスは再び視線を外に戻した。

「空を見てたんだよ。呆れ返るくらいに高い空だ。薄い雲がふかりふかりと流れていてな。そいつを見ていた。

他にやる事がないからな」

言われて彼女も窓から外を見る。確かにあきれ返るほどに美しく高い空だった。

「空を見上げるなんて久し振りです」

彼女はいつでも地上を見ていた。地上で繰り返される悪事の数々を滅ぼすばかりで、遥かな天の高みを望む事はなかった。だから神は自分に何も言わないのだろうか？

だがトゥルスの考えている事はポルメリアのものとは無関係だった。

「これだけ空が高いと、何もかも食い時だよな」

ぼつりと言った彼の言葉に、しばらくポルメリアは反応できなかった。

「は？」

「羊や豚は丸まると太る。林檎、梨、柿、栗、アケビ、木になるものは何でも熟れて旨い。川の鮭、鱒も脂がのっている。夏麦は収穫時。何でもかんでも旨いよな」

トウルスはやや惚けたように空を見ながら、そんな事をゆっくりと言った。話についていけず、ポルメリアは戸惑いを隠せない。

「・・・それがどうしましたか？」

今度はトウルスが信じられぬという顔をしている。だがそれは彼女が今までに見た事のない表情だった。それは虚無でも暗い歓喜でも憎悪でもなく、呆れ顔だった。

「食いものに興味がないのか？」

「ないと言いませんが、お腹が膨ればそれでいいのではありませんか？」

彼女のその言葉を聞いてトウルスの呆れ顔は軽蔑となった。

だが彼女にしてみれば深淵の虚無を思わせる彼の黒い瞳に、初めて感情らしきものを見た心地だった。

「呆れ返つても言えねえや。そいつは食いもんに対する冒涇だよな」

「そうなんですか？」

「そうだろう！ 旨い食いもんを誰だつて食いたいだろう。腹が膨ればなんだつていいやつて、そりゃないだろうぜ」

「はあ。しかし騎士団にいた時から食べられるものは何でも食べると教えられてきましたので」

「そりゃあ、俺だつてそう教えられたさ。遊牧生活つてのは苦しいんだぜ。」

ルトロウはまだまだだが、それより北の連中は夏は家畜の乳や酪、冬は肉、それだけしか食べられない。

時々略奪して他の食いもん調達しなけりゃ生きていられない。

でもこう、季節ごとにおいしい食いもんを味わう楽しみつてもんがあるだろう？」

トウルスの珍しい長口舌を聞いても、ポルメリアは理解できていないようだ。困惑したまま自分が経験してきた事を言うしかない。

「私は、そういうものには縁のない生活をしていましたから。」

いつでも与えられたもので満足するよう教えられてきました。それが屈強な戦士の条件なのだ」と

確かにポルメリアの言うとおりではある。粗食に耐え、どんな環境にでも粘り強く耐えて戦い抜く力が兵士には求められる。だがそれはあくまでも戦いの中での話だ。人生は戦場での時間ばかりではない。

「そうは言っても何か楽しみつてもんがあるだろう？ 旨いもんを食うのは楽しい事だぜ。」

それともお前にはそういう楽しみがないっていうのか？」

「・・・そうですね。なかったと思います」

躊躇いがちのポルメリアの返事にトウルスは今度こそ本当に呆れ返った。

「お前の事、以前に噂話で聞いた事があるんだけどよ、その時その連中はお前の事を『戦闘人形』つて呼んでいたんだ。別に気にもしなかったんだが、今のお前の話を聞いていると納得できるよな」

「・・・私は自分が優れて効率的な戦士になるよう鍛錬を続けてきました。今もそうです。」

『戦闘人形』と呼ばれる事に違和感はありません。でもそれを言うなら貴方は『復讐人形』ではないのですか？」

冷静なように見えて、いつもは自分の復讐の事にしか頭が働かないトウルスにまで、そんな事を言われる筋合いはないと思ったのか、彼女はやや辛辣に言い返した。

言われてトウルスは一瞬頭に血が上ったようになったが、しかしすぐに気を取り直したようだった。考えてみればそうなのだ。

「まあ、普段はそれしか頭にないからな。そうじゃないと自分の価値を見失いそうになる。

あの時の恐怖が甦ってくる。仲間や家族を蹂躪していった奴に対して、

ただ恐怖に震えてなすすべなく、逃げ出す事すらできなかった自分を思い出す。

『城砦落し』、俺はお前を羨ましいとは思わない。

季節の食い物にも無関心なお前の感覚はどうかと思うけど、だが一つだけ俺にも欲しいと思うものがある。

それは、お前が恐怖を持たないという事だ。それがあれば、俺はこんな風に思いつめる事もなかっただろうに、と思う」

言われてボルメリアは清冽な瞳を苦しげに伏せた。

「恐怖を持たないという事は、何の為の能力なのか。貴方は考えた事がありますか？

私は最初に敵に切りかかるもの。

私は最後まで踏み止まって戦うもの。

私は最初に倒れるもの。

私は、自分の人生を人の為に使うよう定められたもの。

だからこそ、私はこの力を授かり天使の眷属となった。私には己を持つ資格はないのです」

「それがお前の考えなのか？」

ボルメリアは首を振った。

「考えとか、そういうものではありません。私はそのように育てられ、そして善なる軍神に契約によって捧げられた者。

私は死の瞬間にいたるまで、善なる軍神の下僕として人々の為に剣を振るい、戦い続けるでしょう。

戻る道など初めからありません。私は、前に進むより他に知らないのです」

再び、いややつぱりトウルスは呆れ顔になった。そして納得したように言った。

「だから『戦闘人形』って言われるんだよな。人生楽しいとか考えたこと、ないんだろ」

「楽しいとかつまらないとか、そういう事を考えるものなのでしょうか、人生とは」

ボルメリアにとって用意された人生をそのまま生きる事に何の疑問もないのだろう。だからこそ恐怖心を持たないのだろうか。トウルスは白い髪をくしゃくしゃと掻き毟った。

「俺は他人を同情した事がない。そんな事はどうでもいい事だったからな。だが今お前の話を聞いていると、こう、何だかお前が哀れに見えてきた」

「どっついう事でしょう?」

トウルスの黒い瞳に嘲りや蔑みはなかった。

それは透明で何の感情も混じらず、ただただ自分の思った感想を口に出しているようだった。それだけにボルメリアは困惑した。自分には哀れと思われる理由などないと思っっているからだ。

「お前は生きているというよりも、生かされているという感じだ。

自分の意思とは無関係の、他人の思惑で生かされている気がする。

お前はいつだって、戦う理由を他人に求めている。そんな気がする。

俺とは違うよな。俺は自分が奴の断末魔を聞きたいから旅をしているんだぜ。

お前は、そういうのがないんだろ?」

それは確かに彼の言う通りかも知れない。赤き巨龍は人々の害となる。だから倒さなければならない。

しかしトウルスやイリネアの様に強烈な殺意などない。人々の為に剣は振るうが、その中に自分の喜びなどないのだ。

「俺にはそれが哀れだと思っがな」

「何故です?」

「人の思惑に従って生きているのが楽しいのか?」

「人生に楽しいも苦しいもありません。私はただ自分の役割をこなすだけです」

そう口にして彼女自身が疑問を感じた。そうだろうか。本当にそう思っているのだろうか。しかし答えなどない。解らない。

彼は蔑むように唇を歪めた。

「そういうところが、俺には気に食わないんだな。お前は人間……っていうか生き物じゃない。やっぱり人形なんだ」

彼女は言い返せなかった。そうかも知れない。

ボルメリアは物心付いてこの方、命じられるままに剣をとり鍛え、そして戦った。

善なる軍神の命を受けてからは、悪を滅ぼす事に血道を上げた。

そこに彼女自身の意思がなかったとは言えないが、全て他人から指し示された道だった。

今このように赤き巨龍を追いかける仲間と行動しているのも、イリネアに誘われたからだ。

しかし、だからどうすればいいのだろう。結局のところ彼女にできることは剣を振るい戦う事だけなのだ。

「……例えば人形だろうと、必要とされるなら私は『悪』と戦う。それが私の人生なのです」

清冽な彼女の青い瞳は、それでも怯んだり迷ったりしなかった。というよりもそんな事もできなかった。

それが人形と言われる所以だとも彼女は気づいていないかも知れない。その強さが彼を苛立たせた。

「けっ。だから俺はお前が好かんのか」

残念だが人の好みだけはどうしようもない。ボルメリアは溜め息をついた。

「でも、私は貴方を信頼しています。『龍殺し』」

彼女の言葉にトウルスは何も答えなかった。それでおしまいだった。

ドウルワイトが彼の幸運の神に託宣を請うた結果は、結局西に向かえなかった。西の辺境、いと高き山脈に辿り着く前に、かの悪魔と巡り合うという。

「……何も解らないのと同じじゃない」

イリネアは腐すがドウルワイトはめげない。

「推測が神のお墨付きで確証に変わったんだよ。その点を評価して欲しいね」

「そうかな。あれを見たらあんたでも考えが変わると思うよ」

ドウルワイトの受けた託宣を元に西に向かって旅立った一行は、いくらも進まないうちに焼け野原に出くわした。野焼きや野火によるものではない。炭になった家屋の残骸や、生々しい人の形をした黒い塊が転がっている。

二ームが襲われた後、すぐにロスペロツソによって行きがけの駄賃に焼き払われたのだろう。小さな集落はロスペロツソのたった一吹き炎で壊滅していた。

「……酷い」

思わず漏らしたポルメリアの視線の先に、重度の火傷を負ったまま、川まで這いずろうとして息絶えた死骸があった。熱さに苦しんだあげくもがき続けたのだろう。川辺には別の死骸があった。

辿り着きはしたが水を飲むことも浴びることもできず力尽きたのだ。

しかし、この惨劇の跡に動揺しているのはポルメリアばかりだ。他の三人は平然としたものだった。

「ね？こんな風にあからさまな痕跡を残しているのよ。まるで追い駆けてこいと言わんばかりに」

イリネアの片目に浮んだのは、哀れみや怒りではなく、ドウルワイトに対する優越だった。

ドウルワイトの不満もなんだかの的がずれている。

「おかしいなあ。何でこれ見よがしに人を襲っているんだろう。この悪魔の頭はおかしくないかしらん」

「それよりもだ。こんなに派手に移動しているなら、賞金目当ての他の冒険者に先を越されるんじゃないのか」

トウルスにしてみれば、それが一番重大な事だ。

彼は自分自身の手で仇と思われるロスペロツソの息の根を止めたいのだから。それはイリネアにしても同感だった。

「そうね。冗談じゃないわ。急ぐわよ」

「そんな。せめてこの人たちを埋葬させて下さい！」

ポルメリアは顔色を変えて懇願した。通りがかりの悪魔に、何の咎もなく虐殺された人々の魂を慰める為の時間すら惜しいのか。そう批難したくなる。

だが彼女の願いは却下された。ドウルワイトですら応じなかった。

「これも運だよ。大丈夫。この死骸は無駄にはならない。獣や虫や植物の糧となり、大地に戻って新たな命の種となるさ」

「・・・死者の尊厳や安らぎはどうなるのです」

イリネアとトウルスは冷たい一瞥だけで返事もしなかった。ドウルホワイトだけが答える。

「それが運なんだよ。解らないかな、『城砦落し』。尊厳を得る事も、安らぎをうる事も、運なのさ。」

世の中には、そんなものが得られない死が満ちている。そして僕たちは先を急ぐ。悲しいけれど、そういう事なのさ」

そういうものなのだろうか？ポルメリアは納得できないまま、しかし一人残って人々の埋葬を行うとも言い出せなかった。

イリネアとトウルスは物苦しく先を急ぐ。ドウルホワイトはそれについていく。

ポルメリアは、ロスベロツソを倒す事で無残な死骸がこれ以上増える事を阻止するのだと、無理矢理自分に言い聞かせた。

神託や人々の証言を待たなくても、ロスベロツソの通った道筋は明らかだった。

累々たる屍、燃え上がる家々、町、傷ついた人々が連なっている。

人々を支配する権力者の城も例外ではなく、むしろ狙い撃ちされているようでもある。

それゆえ、権力の不在が生じ、彼らに脅威を感じて隠れ潜んでいた盗人や怪物たちが徘徊始める。

それは、道を進むにつれて頻度を増した。

僅か四人の道連れである。盗人も怪物たちも、目的は異なれど容赦なく襲いかかってくる。

リュイシスが自分の代わりにドウルホワイトをイリネアの道行きに回したのは、まったく正しかったが、実のところドウルホワイトの治癒呪文が力を発揮した事はなかった。

たった一人で城を陥落させる『城砦落し』ポルメリアと、やすやすと竜の堅牢な鱗を打ち破る『龍殺し』トウルスである。

盗人は元より、竜ほどの脅威を持たない怪物たちなど、物の数ではなかった。

だが問題はそんなことではない。

ポルメリアはこちらの力を見せ相手を屈服させればそれでいいと考えているが、イリネアやトウルスは違った。

特に人間の盗人相手に容赦がなかった。身ぐるみ剥いで放り出せばいい方で、時には命まで奪った。

それでいて平然としている。逆に善行を施したと言い張っている。

「武器も食い物も持たずに、この荒野に放り出されたら、生きながら獣や怪物たちの餌だぜ。」

一思いに殺してやった方が慈悲深いってんだ」

これについてはドウルホワイトは苦笑するばかりであり、困ったものだと首を振るだけだ。イリネアは問題にすらしていなかった。

「殺さずにすむものまで殺すというのは、納得できません」

清冽な青い瞳でポルメリアはトウルスを見る。だが彼の深淵の瞳は彼女をせせら笑うばかりだ。

「あなたのその言い方は、自分の手を汚したくないからだと聞こえるがな。」

どっちみち死ぬなら、楽な死にの方が良くないかい？あんたには、そう思えないか？」

トウルスの言葉を聞いてイリネアも振り返る。彼女の片目が冷たくポルメリアを見ている。

二人には楽な死など与えられなかった。

文字通りの生き地獄を歩んだあと、その地獄をもたらした相手に地獄を見せようと旅を続けているのだ。

ポルメリアには強いて二人の言葉に抗う事はできなかった。その理由があまりにも白々しいと自分でも思えたからだ。つくづく修行が足りないのかも知れない。

二丁目の廃墟から追跡を始めて十日余り、ついに一行はロスペロツソの姿を捉えた。生き残った村人から、つい昨日襲われたばかりだとの話を聞いて足を早めた結果だ。

地平線の遥か向こうで赤い閃光と爆音が響いている。

「あれはメルロンの城塞都市の方角ですねえ。戦っているのかな？」

ドウルワイトは眩きながら旅連れの三人を顧みる。ポルメリアは静かにはやる自分の気持ちを押さえているようだ。メルロン市民の惨劇を見ながら、自分にはまだそれを止める力がない事に苛立っているようでもある。

イリネアとトゥルスは不満そうだ。このまま駆け出して戦いに参加しそうな顔をしている。だが危ういところで踏み止まっているらしい。トゥルスの言葉の端々からそれが伝わる。

「くそっ、そこでくたばるなよ。俺が行くまで持ちこたえていろよ。お前の首を俺のもんだ。お前の命は、俺のもなんだ」
気持ちは解るが、他の言い方はないのかとも思う。

「どっちみち私たちには空を飛ぶ奴と戦う手段がない。リュイシスたちと合流しなければ戦う事すらできない。今は待つしかない・・・だが、私達は運がいい」

イリネアは最後の眩きに暗い歓喜を込めていた。

確かに運がいいと言えるだろう。悪魔の血を引くとは言え、空飛ぶ竜の足は早い。

地上を移動する彼らを引き離す事なんて簡単だ。ロスペロツソは変質的なまでに殺戮を好む性格なのかも知れない。

だが・・・とポルメリアは思う。

そんな怪物が今まで鳴りを潜めていたのはどういう事だろう？あれだけの巨体と破壊力を持つ怪物だ。

そして一日として生きる者を殺さなければおさまらないならば、今までだってそんな事を繰り返し、そしていつか人々や、あるいは善なる神々の使徒によって滅ぼされていただろう。

そんな悪魔が、何故突然姿を現し、そしてこれ見よがしに都市や集落を襲っているのだ？

ただの気まぐれで他次元から襲来し、この殺戮を行っているのだろうか？では三年間音沙汰がなかったのは何故なのだ。それもただの気まぐれなのだろうか？

それとも？

遥かに雷鳴が響いた。

メルロンの魔術師が放ったものだろうか？しかしそれをものともせず、ロスペロツソは炎を吐き出し、街を蹂躪している。その時、相手がチラリとこちらを一瞥した。ただの気のせいかも知れない。

この距離ではいくら竜の超感覚を持ってしても彼らから見れば小さな人を感じする事はできないだろう。

それでも、ポルメリアには一抹の疑念があった。

もしかしたら、奴は私達を誘っているのかも知れない。

何の為に？それをする理由などないではないか。

奴から見れば私たちなど非力な存在にしか見えないのではないか？

広範囲の破壊と殺戮にしか興味を持たないものが、巻き添えをくって人生を破滅させられたものに興味など持つだろうか？

そうだ。奴にはそんな理由はない。考えすぎなのだ。

ポルメリアはそう結論づけるしかなかった。

不意に白い風が吹く。信じられない事に、トゥルスは滅びつつあるメルロンの街を見て歓喜に震えていた。彼は、メルロンにいた者たちによってロスペロツソが殺されなかった事を喜んでいるのだ。

「よし、よし。ちゃんと生きているな。そのままいろよ。俺がお前を殺すまで、そのままいろよ！」

狂気の風が吹いている。白い狂気の風が。

トゥルスはポルメリアを哀れと言った。

だが彼女にとっては、彼の方こそ哀れなのだと思えてならなかった。